

書評

Douglas Murray, *The War on the West*
(New York: Broadside Books, 2022, pp. 1-308)

「文明は、他殺ではなく、自殺によって滅びる」
(A・トインビー『歴史の研究』)

アスキュー 里枝*

20世紀そして21世紀において、アメリカ合衆国は、自らの誇る自由主義や民主主義を、独裁政治や全体主義から守るため、数々の敵と戦ってきた。二つの世界大戦然り、冷戦然りである。21世紀初頭のイラク戦争も、自由主義（アメリカ）対全体主義（イラク）というおなじみの図式の中で繰り広げられた。最近よく耳にする、「米中イデオロギー闘争」という言葉もまた、この図式を踏襲したものであるのは言うまでもない。

しかし、近年のアメリカでは、一つの大きな変化が起こっている。アメリカは、これまでのように自由主義や民主主義を象徴する確固たる存在ではなくなってきているのだ。というのも、自由主義や民主主義を脅かす敵が、外国（外側）だけでなく、国内（内側）にも多くいるからである。実際、今日のアメリカでは、一つの文化戦争が展開されつつある。それは、アメリカの自由主義的な文化・伝統を内側から破壊する一種の文化革命である。

1980年代にアメリカの大学で登場した「批判的人種理論」(critical race theory)の普及によって、西洋文明が、人種という偏ったレンズからのみ糾弾され、あらゆる西洋の文化遺産が「人種差別、帝国主義、あるいは奴隷制」(racism, empire, or slavery)と結びつけられて、排斥されるようになった(174頁)。その影響は最初こそ限られていたが、徐々にアメリカ全土に浸透し、その他の西洋諸国にも飛び火して、昨今、突如として勢いを増している。その結果、近年、西洋各地で偉人として仰がれてきた人々の銅像が倒され、教会が破壊され、聖書が焼かれ、少なからぬ古典文学が禁書（あるいはタブー）となり、西洋は自らの手によって、その文明を抹殺しつつあるのである。

* 執筆者：アスキュー 里枝

所属/職位：立命館アジア太平洋大学アジア太平洋学部/非常勤講師

連絡先：〒874-8577 大分県別府市十文字原1-1

E-mail: riaskew@hotmail.co.jp

イギリスの知識人で、『大衆の狂気』(*The Madness of Crowds*, 2019)などのベストセラーで知られるダグラス・マレー(Douglas Murray)は、その近著、『西洋への戦争』(*The War on the West*, 2022)において、西洋に対して、西洋内部の人間自らが「正義」(justice)の名のもとに行なっている破壊行為の欺瞞を暴いた。これは、これまで漠然と、断片的にしか見えていなかった現代史の悲劇を、はっきりと総合的に描き出した、重要な本である。

西洋文明解体事業に勤しむ者たちの恐ろしい点は、そのラディカルな意見だけではなく、自分たちとは違う意見の持ち主に対して徹底的に悪の烙印を押し、反対意見を封じこめる、というカルト的傾向にある。実際彼らは、社会を自分たちの意見に与する「聖人」(saints)か、与しない「罪人」(sinners)かに二分し、後者を徹底的に吊るし上げる(156頁)。意見の違う者同士が、お互いを尊重し合いながら議論するという、西洋が育んできた寛容な啓蒙主義的精神は彼らにはない。こうして西洋は今や、言論の自由やりべらるな伝統から背を向け、一種の全体主義の支配する世界となりつつある。

いったいどこからおかしくなったのだろうか?マレーによれば、始まりは1987年のスタンフォード大学の出来事あたりであるという。このアメリカ屈指の名門校では、当時、西洋の古典や伝統を教える「西洋文化」(Western culture)という入門コースがあったが、これがそのとき問題になった。人種理論に親しんだ抗議者ら曰く、大学において西洋の古典を教えることは、西洋中心主義的であり、人種平等、多様性、アイデンティティ・ポリティックスに反する、と一部のラディカルな教員や学生がこういった意見を持つこと自体は、それ以前にもおそらくあったであろう。しかし1987年のスタンフォード大学において衝撃的だったのは、大学の運営側があっさりこの主張に折れたことである。以後、「西洋文化」の授業は廃止され、非西洋の文化を網羅した、多文化のコースがとって代わった。そしてこの動きは全米のみならず、全西欧世界に徐々に広がっていった。

西洋の各地で、西洋の哲学や文学・歴史というのは「死んだ白人男性」(dead white males)の産物であり、人種差別主義的で、男権主義的な「恥ずべきもの」(something of an embarrassment)とみなされるようになり、大学のカリキュラムから次々と消えていった(7頁)。オーストラリアではラムゼイ・センター西洋文明研究所(the Ramsey Center for Western Civilization)が西洋文明を学生に教えるために、オーストラリア国内の大学と提携を図ろうとしたところ、協力してくれる大学を探すのに非常に苦勞をする羽目になった。BBCなどの公共放送でも西洋の文明(civilization)についての番組は中止となって、代わりに様々な文明(civilizations)に関する番組が登場した。文明を論じる時は、多文化主義的アプローチをとるか、そうでなければ西洋文明の罪を語ることがお約束になった。実際、英国の美しい大庭園を保存

し、公開するナショナル・トラストは、今や美しい庭園を訪れた人々に、その輝かしい文化や歴史を誇り高く紹介するよりも、帝国主義や奴隷制など「過去の惨禍」(the horrors of the past)を伝えることを使命とするようになったのである(9頁)。

もちろん、マレーも認めているように、過去には西洋の文化や歴史が、「何一つ恥じることのない善」(unabashed good)として教えられていたこともあり、西洋にとって、これまでの西洋中心主義を反省することは必要である(8頁)。しかし、現実には起こっているのは、過去の間違いを正す「矯正」(correction)ではなく、「行き過ぎた矯正」(overcorrection)である(5頁)。つまり、西洋の負の面ばかりが強調され、それだけが西洋文明のすべてであり、西洋文明そのものを「廃棄処分」(trash)にすることが、「正義」であるかのように語られているのだ(151頁)。

1980年代にはまだ少数派に過ぎなかったこの一種の文化革命の波が、2020年代においてこれだけの市民権を得たのは、この数十年間の教育の成果(?)であろう。今日、西洋の哲学者や思想家で、人種差別のレッテルを貼られて、貶められていない人はほとんどいない。人種理論の保持者に言わせると、アリストテレスは「科学的人種主義の父」(the father of scientific racism)に過ぎず、カントなどの「哲学者たちはみな人種主義者」(all philosophers are racists)であって何も学ぶべきものはない(166頁, 164頁)。スコットランドでは、エディンバラ大学のデイヴィッド・ヒューム・タワーが2020年、ヒュームの「白人優越主義」のために抗議を受けて改名され、フランスでは同年、アカデミー・フランセーズの前にあったヴォルテールの銅像が、彼の人種差別的傾向のために撤去された(168頁)。彼らも人種主義者に過ぎず、何も学ぶべきものがないというのが人種理論の立場である。

そして大学を中心に広まったこの立場は、今日、あまりにも多くの学生を洗脳してしまった。実際マレーが近年アメリカのある大学で講義した際、カントの名前を出したところ、学生から、カントが「Nワード」を使った人間であることを知っているのかという質問が来たという(164頁)。その学生(そしておそらくそこにいた多くの学生)にとって、カントは「Nワード」を使った恥ずべき哲学者に過ぎないのだ。

しかし、多くの思想家に貼られた「人種差別主義者」というレッテルは、しばしば冷静にその思想を分析すれば、誤解に過ぎないものもある。またもし、仮に誤解でない箇所があったとしても、そのことで、本当に一個人の思想なり哲学すべてを拒絶すべきだろうか?ある思想家が、今日の人種理論から見て適当でないという発言を、それもほんの一部でただけで(例えばデイヴィッド・ヒュームで人種差別として問題になっているのは、彼の中心思想ではなく、「たった一つの脚注」にすぎない)、その人の思想から得られるはずの知の遺産をすべて唾棄す

べきであろうか¹？

ここで、奇妙な事実があることをマレーは指摘する。この新しいアメリカ発の文化革命において、多くの西洋文化が否定され、多くの西洋人の銅像が破壊されているが、それは奴隷制や人種差別、帝国主義に関わった人々（あるいはそのように誤解されうる人々）のものばかりではない。その中には、明らかに不相当としか言いようのないものもある。典型的な例が、ポータランドにおけるリンカーン大統領の銅像の破壊である。ごく普通感覚から言えば、奴隷を解放したリンカーンが、なぜ奴隷制支持者とともに、破壊の対象になるのか不可解に思うだろうが、破壊者にとっては、リンカーンが白人であるという理由だけで悪のレッテルを貼るのに十分なのだ²。

そして近年、破壊の新しい標的となっているのが、ウィンストン・チャーチルである。これはマレーでなくとも「驚くべき」(surprising)ことだ(122頁)。というのも、つい数年前まで、チャーチル卿といえは、西洋史上、「もっとも成功した、立派な人物」(the most successful, admirable figure)の一人とみなされていたからである(122頁)。第二次大戦中は、ナチのファシズムとの戦いにおいて、英国を守ったばかりでなく、その在任期間を通じて、彼の判断は、多くの局面において正しく、優れていた。それゆえ、2002年には、英国史上「もっとも偉大な英国人」(The Greatest Briton)として公にみなされていたのである(122頁)。

しかし、わずか20年の間に事態は一変してしまった。たとえば、2021年に行われたケンブリッジ大学のチャーチル・カレッジ(いうまでもチャーチルの名をとってつけられたものである)におけるディスカッション、「チャーチルのもたらした人種的結果」(The Racial Consequences of Churchill)では、一人のパネリストが、大英帝国というのは「ナチよりもはるかにひどいものだった」(far worse than the Nazis)と言い放ち、英国がナチに勝利したことは大したことではないし、チャーチルでなくてもできた。そもそも英国が勝利したからと言って何が変わるわけではない。一方の白人支配から他方の白人支配へと変わったただけだ、と主張した。マレーも言うように、もし、全体主義と戦い、自由を守ったチャーチルのような人間がこのような蔑まれなければならないとしたら、すべての人間の努力は「空しい」(futile)ものとなる(128頁)。

ところがここで、マレーはもうひとつ奇妙な事実を明らかにする。リンカーンやチャーチルが否定されるならば、西洋におけるすべての歴史的人物が否定されそうなものなのだが、破壊の対象から確実に免れている人物がいるのだ。それは、カール・マルクス、そしてミッシェル・フーコーである。マレーも言うように、マルクスの人種差別意識は、「人種差別主義者」

として排斥されている多くの人よりも、はるかにあからさまで激しいものだったが、彼の銅像を倒そうとする者はいない。また、フーコーは児童買春で知られており、その被害者が非白人の子供だったことで、帝国主義、人種差別の罪にも問われうる。にもかかわらず、マルクスと並んで、二人は文化革命のヒーローなのだ。マレーはここに、「反西洋運動の根源」(root of anti-Western movement)を発見することができるという(175頁)。西洋文明をぶち壊そうとする人々にとって、マルクスというのは「世界の革命運動の製作者」(a formulator of a world revolutionary movement)であり、とても「有益」(useful)な存在なのである(180頁)。(実際マレーも言うように、西洋を嫌う人は西洋の資本主義を嫌うのであって、共産主義など、それ以外のシステムにいかなる欠点があろうと、盲目(blind eye)を決め込んでいるのだ(90頁)。)こうして考えてみると、人種理論を掲げる人々がヴォルテールやヒュームを排斥するのは、単なる浅はかな正義感だけではなく、彼ら(ヴォルテール達)の思想にある、意見の違う相手を尊重する寛容性や、偏見を排して、理性的に真理を探究しようとする姿勢が、(人種理論の保持者)自らの専制政治にとって都合だからではないか、という風にも勘繰りたくなる。

古今東西、専制的な人々は、耳心地のいい言葉を使って、自らの思想を正当化しようとしてきたが、人種理論の保持者たちも例外ではない。彼らが声高に叫んでいるのは「人種平等」(racial equality)「正義」(justice)「多様性」(diversity)などだが、どれもそれ自体は良い(あるいは最低でも悪くない)物ばかりである。しかし、これらの言葉は、決して従来意味していた内容を示すものではない。というのも、例えば人種平等な社会というのは、本来、「人種に対して盲目」(color-blind)、つまり誰もが肌の色を気にすることなく渡り合える社会のことを意味するはずだが、彼らの作り出しているものは真逆である(10頁)。彼らの言う「人種平等」な社会とは、何をしても人種問題がからみ、「とてつもなく人種を意識した」(racial ultra-awareness)社会のことである(9頁)。白人が非白人を一般化することは許されないが、黒人が白人を一般化して、悪のレッテルを貼ることは許される。何を言ったかではなく誰が言ったかの方が重要な社会なのだ。そしてこうした不公正こそ、彼らの求める「正義」なのである。また、「多様性」を掲げているにもかかわらず、自分たちと意見の違うものは吊るし上げという独裁性も、彼らの特徴だ。実際彼らに洗脳された若い人たちは、西洋が培ってきた「自由な思考」や「表現の自由」がどんなものか知らないという(10頁)。彼らは進歩的なつもりでいるかも知れないが、やっていることは原始的で野蛮である。

マレーが紹介する、こうした西洋の悲劇は、日本人にとっても決して対岸の火事ではない。その波は日本にも来て(一部すでに来ているかも知れないが)、日本文化を破壊するだろう³。万一日本文化が破壊を免れたとしても、西洋文化の遺産を失うことは人類の知的遺産を失うことであり、日本の文化にとっても大きな損失である。

そして、西洋のこの文化革命を放置することは、政治的にも危険である。マレーも警告しているように、この西洋の文化破壊において、いったい誰が得をするのかといえは、非西洋の専制政治を行っている国々である。西洋の「悪」を暴くことに人目が集中することで、それよりもはるかに深刻な悪を行っている国々は、批判を逃れることができる。西洋が文化戦争に明け暮れている間に、専制主義的な国々は、着々とそのチャンスを生かして、自らの利益になるように動いているのだ。「西洋への戦争」とは、つまるところ、私たちの目をこうした現実からそらす、二一世紀の「パンとサーカス」と言えるかも知れない。

日本は明治以来、何かと欧米志向を貫いてきたが、この文化破壊を学ぶ必要はない。私たちが今、文化面で西洋と距離を置かなければならないのは、これが進歩ではなく、後退だからであり、何よりも西洋の文化遺産を敬愛するためである。西洋が、自らの文化破壊の熱から覚め、過去を再評価し出した時、私たちはルネサンスにおいてアラブが果たしたような役割（つまり西洋が失った西洋の過去の文化遺産を保存し、西洋に逆輸出したこと）を果たせるだろうか？それだけの知性と情熱を持ち合わせているだろうか？それとも安易にこの文化戦争に便乗し、西洋および自らの文化遺産を「廃棄処分」にするのだろうか？文化破壊が大学から始まったように、文化保護もまた大学から始まるべきなのかも知れない。そして文化保護は新しい文化創成のためにも必要である。今日ほど日本の大学の良心が求められている時はない。

注

- 1 人種理論の持ち主は、もちろん、「たった一つの脚注」(one solitary footnote)だけで、ヒュームの功績を「帳消しにする」(wipe away)のに十分だと思っている(168頁)。
- 2 アメリカのポートランドでリンカーンの銅像が倒されたとき、残された台座にあったのは「土地を返せ」(land back)というメッセージであった(47頁)。「土地返還運動」(landback movement)は先住民による反帝国主義的な運動だが、このエピソードは、リンカーンが奴隷解放者としてではなく、帝国主義者・白人優越主義者として扱われていることを示すものである。
- 3 マレーは、非西洋文明は安泰だと思っているようだが、彼の批判する「反西洋的西洋人」(Western anti-westerners)はいわゆる「反日本人」にそっくりであり、文化破壊を受け入れる土壌は十分ある(161頁)。それに日本も広い意味での「西側」として、西洋とともに文化破壊の対象となることも考えられる。